

学 校 だ よ り

蓮 沼 中 学 校

令和6年度 第11号
令和7年3月12日発行
大田区立蓮沼中学校
校 長 張替 健二

「卒業に寄せて」

19日水曜日は、卒業式です。蓮沼中学校を旅立つ三年生を、後輩たち、先生方、保護者の方々、地域の方々、皆で祝い、送り出す日です。

教員室では、「三年生が卒業すると寂しくなるなあ〜」、「しばらくしんみりするだろうなあ〜」、「卒業して誰もいなくなった教室に入ると、しばらく泣けるんだよ」などと言いつつ先生方の声も聞こえてきます。

三年生の皆さん、蓮沼中で過ごした3年間はどんなものでしたか。一生の思い出になるようなことがありましたか。一生付き合えるような大切な人たちと出会えましたか。

さて、先月井原先生が学校便りで「考えるを考える」というお話を書いていました。私は別角度から「考える」を考えたいと思います。

2003年に「茶色の朝」という大人向けの絵本がフランスで出版されました。著者はフランスのフランク・パブロフという心理学者、日本語版の挿絵はアメリカの著名なミュージシャンで画家、俳優、映画監督のヴィンセント・ギャロという人が描きました。もう20年以上も前に出版されたものですが、20年前と比べて世界情勢はさらにこの本にある方向に向かっていくのではとヒヤリと背筋が寒くなるような印象があり、私は折に触れて読み返しています。

どんな本か。

ある男がいます。茶色の犬を飼っていました。そのうち政府から、「黒い犬は安楽死させる」という法律が制定されます。「うちの犬は茶色だから大丈夫」と男は安心して日常生活を続けます。その法律に反対した新聞が廃刊になり、系列の出版社の本が書店から消え、単語や言葉に茶色をつけなければならなくなり、どんどん法律はエスカレートしていきます。男は違和感を少しもちながら、「政府の言うことだから」、とあくまでも従順に従います。そのうちかつて茶色以外の犬を飼っていた人々も警察に連行され、ついに自分の家にも・・・というお話・・・。

主人公の彼の、何が問題か。この本から、私たちは何を学ぶか。

日々の様々な出来事をやり過ごさないこと、常に考え続けること、このことの大切さ。また、市民ひとりひとりの思考停止によって、何かが知らないうちに日常をむしろおぼろげにいくかもしれない危険性、自分が感じた少しの違和感の意味を考え続け、そういったセンサーをもって、これから社会に出ていく卒業生の皆さんには生きていてほしい、そしてできればどんな形でも行動してほしいと思います。

本校では「自分で考え、判断できる生徒」の育成を目指してきました。君たちの未来に、蓮沼中で身につけた「自分で考える力」が役に立つことを願います。

保護者の皆さま、お子さまのご卒業、本当におめでとうございます。ぜひお子さまの卒業後も末永く蓮沼中学校の応援団でいてくだされば、と願います。これまで本校の教育へのご協力、大変ありがとうございました。

文責 副校長 久住直子